

又、舊式砲艦八百トン乃至一千トンのものを數隻改造して、潜水母艦に代用して居たが、一九一二年に特に艤装した新母艦アダメント、アレクト(九三五トン)の二隻が竣工したのである。一九二六年度計畫の潜水母艦は、メツドウエーと命名せられた。

(米 國)

最初の潜水母艦は、舊式モニトル又は老朽砲艦を改造したものであつたが、一九一五年に新母艦ブツシユネル(三千五百八十トン)及びフルトン(千四百八十トン)の二隻が竣工した。ブツシユネルには、潜水艦引揚装置として首尾兩端を電纜敷設船の如き形式となし、揚錨機で約二十七トンの重量を揚げ得る装置がしてある。

(佛 國)

排水量六千トンの大型母艦を造つたのが、その最初である。

(伊 國)

商船を改造した潜水母艦アレツサンドルポルタ(二千四百トン)アントニオパシノツチ(二千

四百トン)の二隻を有して居る。

各國の救難船

潜水艦が今日の發達を遂げるまでには、各國共に幾多の貴き犠牲を拂つてゐることは云ふまでもない。日本海軍に於ても、第三章の四十年間不斷の猛訓練のところで述べたる如く、潜水艦乗員は幾多先殉の尊き屍を乗り超え乗り超えて、ひたすら血の滲む猛訓練と研究を重ねて來たのであつた。

諸君の知る如く——一度び潜水艦が沈没した場合には、普通艦船のそれと異つて、乗員の一部が猶生存してゐる機會が多いから、これが救助は最も急を要することである。しかして、その沈没の主なる原因を挙げれば、○浮力僅少のための浸水○潜航中に衝突のための浸水○ガソリンの爆發○水素瓦斯の爆發○壓搾空氣の爆發○有害瓦斯の發生——等々種々の場合があるが、——各國共この救難問題に就ては、多年苦心を重ねてきた次第である。然し未だ完全なる設備を有するものは、甚だ稀であり、恐らく最初に出來た獨逸の救難船二隻が比較的有力なるものであつたやうだ。次に——各國に於ける初期の救難船の概要を述べて参考に供したいと思ふ。

(英國)

最初に建造された潜水艦救難船は公稱九十四號で、排水量七百九十トン、三百トンの重要を引揚げ得る設備を有し、潜水艦C十一號引揚げの經驗に基き計畫せられたものである。これと略ぼ同一の構造で稍々大型なる九十六號は、四百五十トンを揚げ得る装置がある。右の二隻共普通の救難船で、何等特別の装置ある有力のものではないのである。

(米 國)

潜水艦救難船一隻の建造費三十萬ドルは、一九一三年度の議會に於て協賛を得たが、翌年潜水艦建造費に流用されてしまつた。その後再び建造の運びとなつて竣工されたものが、即ちファルコン及びヴィジョンの二隻である。長さ七百八十七呎、幅三十五呎半、排水量九百五十トン、速力十四ノットでその救難の設備は詳かでないが、さ程有力なものとは思はれない。

尙ほ一九二八年六月に竣工されたオルトラン、一九二九年度に建造された二隻、合計これ等五隻の救難船が、大西洋、パナマ、太平洋、ハワイ、ヒリッピン等に配備され、それ／＼その任務

に就いた。

一九二八年に至つて、造船局長の要求により、潜水艦救難設備研究及び實驗費として二十萬ドルが計上されたことは、注目に價する。

(佛 國)

一九一一年と同一三年の頃竣工した第一第二の引揚船梁を有して居る。平時は普通の浮船梁として使用せられ、潜水艦の遭難した場合にこれを使用するには、先づ床板及び横梁を撤去して代りに桁を架し、前後に移動する軌道を設け、船梁を没没船の上に浮べて鎖を垂下し、これを潜水艦の引揚用眼環に釣して捲き揚げ、終れば先に取外した床板を復舊してその上に船體を安置する装置のものである。

(伊 國)

救難船アンテオは長さ百六十四呎、幅七十三呎四分の三、排水量二千百トン、速力八ノットであつて、二個の起重機を有し、各單獨に又は聯合して使用することが出来、合計四百トンの重量

を引揚げ得る装置である。又、潜水夫の動作し得ない二百呎の深海から、潜水艦を引揚げる特殊の装置があると云はれて居るけれども、その眞偽は不明である。

(獨逸)

潜水艦救難船として特に建造されたこの種の魁をなしたのは、實に獨逸海軍のフルカン號であつて、一九〇八年に竣工してゐる。長さ二百三十呎、排水量千八百トン、自力で推進する船梁船である。そして、五百トンの重量を揚げ得るといふ電動起重機を備へて居る。本船は常に潜水艦と行動を共にして、彼の一九一一年にU三號潜水艦が遭難した際に、急速これが引揚げに従事して乗員を救助した輝く功績がある。

第二の救難船サイクロロープは、推進装置を有して居ない。この二隻は、前大戰の休條戰約によつて、共に聯合國に引渡されたが、今日列國海軍中でも最も潜水艦の發達せる獨逸としては、この種優秀なる救難船が多數あるであらうことは、容易に想定し得るのである。

最後に——日本海軍に於ける潜水艦救難船の狀況はどうか。わが國に於ては、大正十二、三年

の頃相ついで潜水艦の沈没事件が起つたので、海軍部内は勿論、民間の有志者中からも、救難に關する幾多の考案の申出があつた。そこで海軍當局に於ても本問題に對しては常に熱心に對策を講じて居たから、救難作業に經驗深き福井造船少將が、曾て尼港、青島並に第四十三潜水艦引揚作業に於て、良好なる成績を収めたる考案を基礎として、所謂——井戸釣瓶の原理を應用した装置を立案し、これに山高、蛭田兩海軍技手の考案を併用して——特務艦朝日(一萬四千五百トン)を救難船として艦裝することゝなつた。

しかして、舊獨逸潜水艦①一號(千四百五十トン)を沈没潜水艦に、同②二號(七百五十トン)を重錘船に使用して屢次實驗を重ね、遂に水面下二十七尋の深さに沈めた潜水艦を、短時間で引揚げることが出來て立派に成功したのであつた。

勿論、かゝる作業は天候、水深、潮流の關係等によつて左右せられ、如何なる場合に於ても同様に成功するとは斷言し難いのである。とも角、從來救難に對して何等の準備もなかつた狀況に比すれば、このわが特務艦朝日に於ける引揚装置の成功は、潜水艦乗員に對する一大福音であり、又列國海軍に對しても大なる誇りと云はねばならぬ。

この成功を擧げるまでの——關係者一同の苦心と努力とは、實に非常なものであつたが、いつ

しか事 天聴に達し、特に敍勅賜盃等の優渥なる御沙汰のあつたことは、まことに難有いことである。

今日に於ける救難船の状況は、各國共その内容を發表して居らず、故に茲には書くことが出来ない。わが國のそれに就ては、勿論省略せねばならぬのである。

救難船に關聯して、潜水艦運搬船といふのを思ひ出した。これは文字通り、潜水艦を運搬するのであつて、佛國のロープーフ型潜水艦の建造會社であるシュナイダー社が、始めて建造を試みた。即ち外國の注文にかゝる潜水艦を運搬するため、カンガルイ號を建造したのであつた。

同船は、長さ三百五呎、幅三十九呎三分一、深さ二十三呎六分五、排水量四千五百五十五トン、速力十一ノットであり、潜水艦の出し入れには船首の一部を取り外づして、船の中央に潜水艦を入れる装置になつてゐる。これによつて始めて潜水艦を運搬したのは、一九一二年にロシアの潜水艦フェリイを送つたことである。

わが第十五潜水艦を佛國ツィロン附近より英軍港まで運搬して來たのも、この船であつた。前大戦中に於ては、運送船として活躍してゐたが、マデイラ島附近で獨逸潜水艦U三十八號のため

に撃沈されてしまつた。

潜水艦と飛行機の問題

海運と潜水艦

潜水艦戦と航空作戦及び——海運問題の三つは、切つても切れぬ關係にある。

近代海戦が、制海権の争奪を根本義として行はれるのは云ふまでもないが、それが一大決戦を経なければ、制海権の歸趨は定まるものではない。

トラファルガーの海戦なり、日本海海戦なり、ジュットランドの海戦なり、今次のハワイマレー沖の海戦なりの——大戦果を挙げた後でないといふ、ほんとの制海権は掌握されるものではない。そこで優秀なる海軍國は、開戦後なるべく速かに劣勢海軍國に決戦を挑まんとするものである。劣勢海軍國は又なるべくこれを避け、奇襲作戦によつて敵勢力の漸減をはかりその勢力の均衡を見て始めて決戦に臨まんとするものである。又、他の方法としては、佯動作戦によつて敵の有力艦隊をその方向に分離せしめ、その虚に乗じて残留艦隊に決戦を強ひ、そこに局地の優勢を占めて個々撃破の舉に出でんとすることもある。

しかし、この決戦は全戦局を通じて一回か二回が關の山で、一回の決戦に敗けた海軍は、大體全戦局挽回すべからざる悲境に立たせられるのが通例である。従つて容易にこの決戦は、優勢國の思ふ通りには行はれないのである。

しからば、その間に於ける海軍力は如何なる方面に最も重點をおいて活動するかといふと、それは敵國の通商破壊を目標とする——海運の撃滅に向けられるのである。

殊に近代國家の存立上、貿易はその重要部分を占めるのであるから、海軍戰略の重點が——自國の貿易を擁護し、敵國の通商路を遮断するための戦ひにおかれるようになるのは、また已むを得ないのである。

しかも、海戦の全體を通じてこの期間が最も多く、敵國の海上貿易を全滅せしむることによつて、(その經濟力を涸渇せしめること)——が、英蘭戦争以來、常に海上權を握つた國の最大の武器であつたのである。このことは——通商破壊戦を觀るの章で、簡単に觸れておいたから、諸君は既に理解されたことと思ふ。

今次歐洲大戰以來——特に大西洋の海上作戦に於て、軍事要素より經濟要素を重んずる傾向が益々甚しくなつたのは、敵國の領土に對する攻撃によつて勝利を収める機會が減少した如く、今

一つは主要國家が海運による物資の供給に依存する程度が増大したからである。かくて——近代海戦は、この海上貿易の攻撃、防禦に多大の勢力を集注されるのである。こゝに——その攻撃、防禦の最有効兵器として、潜水艦、飛行機の登場を見たことは當然の結果であらう。今や英米側に於ても、海軍戦略の重點は、潜水艦戦と航空作戦に置かれて、樞軸側の經濟力破壊へ、必死の努力を傾けてゐるのである。

諸君は、この事實に關して、充分の警戒と觀察を怠つてはならない。

從來、太平洋方面では比較的海運の數量も少く、その重要さも一般にさう死命を制するといふ程ではなかつた。依つて——海運を杜絶したゞけでは海上權力國の決定的武器となすに足らなかつた。日清、日露の戦争の場合に於ては、軍事目的が經濟的要素よりも遙かに重大であつた。

しかし現今は、日本にとつては大いにその趣きを異にし、軍需資材の供給に於ても、食料の確保に於ても、軍隊の輸送に於ても——海運の杜絶は日本の生存にとつて絶對のものとなつて來たのである。

殊に大東亞戦下、英米を相手とする今日に於て、假令外洋貿易は大半杜絶したとは云へ、大東

亞共榮圏内の海運は、多々重要性を増して來たのであるから、若し、この海運に敵英米の脅威を受けることゝなれば、今後の作戦上多大の蹉跌を生ずるのみならず、經濟生活上にも少からざる苦痛を蒙ることゝなるのである。

こゝに——その海運を確保するために、潜水艦隊、航空部隊の活躍が期待されるわけである。従つて、日本海軍としては、最小限度に於て絶對に——大東亞水域の制海、制空權を掌握して、わが海運の保護に當らねばならないのである。

更に、今次の戦争に於ては大西、太平、印度の三大洋に及ぶ廣汎なる水域の各地に大作戦を展開されるのであるから、軍隊輸送補給、兵站線の維持等ことごとく海運によらなければならぬのであるから——この海運こそは、作戦展開の大動脈と云つていゝのである。

敵の海運を全滅せしめ、わが海運を確保するために、日夜わが潜水艦隊が人知れぬ勞苦を重ねて居ることを、諸君は深く銘記すべきである。

茲に大東亞戦下に於けるわが海運界を顧るに、到底日清、日露の比ではなく、その規模の大なれば大なるほど、一層御用船の要求を増大すると共に、その活動區域も擴大し、これに伴ふ危険

も倍加するものと考へなければならぬ。又一方、長期戦に對する生産擴充資源の輸送、食料燃料の確保等にも、今後一層の輸送力を必要とするのであるから、わが海運界に對する要求の一段と昂まることは必死である。

幸ひにして、五年間の支那事變に於て直接戦争よりの被害はなく、むしろ事變中の造船繼續によつて、その後トン数は逐次増加してゐるのである。又、歐米航路の休止によつて若干船腹の餘裕を生じ、これを他に轉用するの便宜をも得たのである。しかるに大東亞戦争勃發によつて、英米船舶の東西よりの總退却によつて、支那、南洋方面の輸送は、日本一手でこれを引受けなければならぬこととなり、著しく船腹の不足を告げる現状となつた。

又これと同時に、英米潜水艦の海上ゲリラ戦の展開をも、益々激化する傾向にあり、これ等が支那海、南洋海域の通商破壊乃至連絡遮斷を企てるものとせば、多少の損害も顧慮しなければならぬ。

又、英米空軍の陸上基地の再建を豫想し、自然に長期に移行するものとして、一面交戦、一面建設を併進せねばならぬことは云ふまでもない。樞軸側の勝利と共に、また一方印度洋並に歐洲航路の再開によつて、こゝにも亦、船腹の需要が生ずることは自ら明かである。

——かく考へて來ると、大東亞戦の遂行も、大東亞共榮圈建設の地ならしも、歐亞連絡による樞軸側との堅き握手も、一つにわが海運界の力に俟たなければならぬ。しかもこれ等は、戦後の經營ではなくして、今日より直ちに着手されねばならぬものであつて、わが船舶は——東亞は勿論、ひろく七洋狭しとばかりにその日章旗を以て塗り潰さねばならぬのである。

今や、敗戦に喘ぐ英米海運界は、日を逐うて窮迫の度を増しつゝあり、日獨伊潜水艦の猛威の前に施すに策を知らぬ様である。

今次歐洲大戦開始以來大東亞戦争關係分をも合せて、百トン以上の喪失船舶を見れば、實に一千七、八百萬總トンに及び、それは前大戦時に於ける喪失船舶約一千五百萬總トンをはるかに上廻つてゐるのである。今次大戦直前の世界船舶總トン数は、六千八百萬總トンであつたから、既にその四分の一以上が海底の藻屑となつたわけである。

この四分の一の大部分は、勿論英米及びその與國に屬するものであるが、以上の數字によつても、如何に英米が船腹不足に深刻なる悩みを持つてゐるか判るのである。

しかるに昨今、——

樞軸側潛艦の新攻勢は、俄然彼等の新造能力を遙かに引き離した撃沈トン数を示し始めたこと

は、既に述べた通りである。

作戦の動脈たる——海運問題を巡つて、日獨伊潜水艦の攻防戦は、むしろ今日以後に期待さるべきであらう。この秋に當つて、わが海運界がさほどの損害も受けず、むしろ船腹が逐次擴充されつゝある状況は、まさしく將來の雄飛を約束するものであつて、英米海軍の連敗が樞軸側の勝利を豫約してゐるのと相俟つて、わが國運の隆昌を語るものであらう。

潜水艦と飛行機

今度の大東亞戦は、雄渾豪壯なる大構想の下に行はれてゐる世界無比の大戦であることは、今更云ふまでもあるまい。この意義ある大戦争に於ける——近代海戦の特徴を要約してみると——

作戦地域の廣汎なること、

近代的立體戦の花形なること、

制海、制空は一體なること、

陸戦隊作戦の特異性

——等が擧げられるのである。

戦場の廣大なる點では、日露戦争の日本海々戦も、古今東西の海戦史で特例の一つとして數へられて居たが、今次の大海洋作戦は、開戦劈頭に於けるハワイ海戦、マレー沖海戦を始めとし、その戦闘水域は太平洋から印度洋へと擴大し、——殊にわが海軍航空機と潜水艦は、東西一萬里に亘る大空や水中を縦横無盡に活躍してゐるのである。前大戦の時でもその戦場は、世界の各水域に亘つては居たけれど、一國の海軍が單獨で今次の戦争で日本海軍が敢行して居るやうな廣汎なる海上の作戦は、未だ曾て例がなかつたのである。

願れば——日露戦争當時までは、飛行機も潜水艦も海戦に参加しなかつたので、海戦は純然たる平面戦であり、前大戦から初めて飛行機や潜水艦の参加によつて、立體戦を見るに至つたのである。しかもそれとても、未だ今日に比べれば至極幼稚であつて、今回のやうな花々しい立體戦を展開する域には進んで居なかつたのである。

兵器及びその裝備艦艇の發達により、海軍戦術即ち海戦術には、從來幾多の變遷を見たものであるが、今日に於ける——飛行機、潜水艦の進歩發達は、他の新兵器の採用と相俟つて、かくの如く現代の海上作戦方法に特異の大變革をもたらしたのである。

近代海戦の特質の一つたる——(制空、制海は一體なること)——この制空権と制海権の問題に就て、少々詳細に解釋を加へてみたいと思ふ。と云ふことは同時に、飛行機と潜水艦の威力の比較及び兩者協同せる場合の威力を解釋することになるからである。

そもく制空権の争奪戦は、海上権獲得のための各種手段の一つに過ぎないのである。換言すれば、制空権の獲得は制海権獲得上の絶対必要條件であつて、同時に又制空権なきところに制海権獲得は不可能なりとさへ云ひ得る。

——海上に於て、或る企圖を有効に遂行するためには、少くとも一定時間殆んど完全なる制空権の掌握を必要とする。例へば、敵國沿岸に對する作戦の如き場合である。その他の場合に於てはこれと異なり、空中に於て充分なる優勢を保つか、又は敵と同等の兵力を有するのみで充分であらう。制空権争奪戦をば、單獨の戦闘と考へるのは正しくない。何となれば、この種の戦闘は企圖されたる海上作戦と——密接なる連繫を保つてこそ始めて意義を有するからである。

こゝで特に注目すべきは、——制空権は、概して局所的のものであるといふ事である。何となれば、飛行機は速力が大であるので、一旦敵機を撃滅しても、新たなる航空兵力が短時間で敵の他地点から、その場に到着し得るからである。つまり、補給力さへ旺盛なれば、失はれた制空

権も奪回し得る場合があるからだ。この實例は南太平洋ソロモン方面の激戦で、彼我の間に繰返されたことを諸君は御承知であらう。然しかゝる争奪戦の最中でも、一旦獲得した制空権は相當期間永續するものである。何故なれば現用飛行機は極めて短時間で製作し得るものではあるが、損失飛行機の補充に當つては、先づ人員の訓練を問題とせねばならぬからである。

この意味から見て、目下狂奔してゐる米國空軍再建に於ても、單に豫定の臺數だけ飛行機は完成しても、その人員の訓練がこれに平行せぬ限りは、佛作つて魂入れずと同結果に終るのではな

いか。

さて、制海権獲得の上に於て、飛行機の受持つ大きな役割の一つに、偵察索敵と云ふことがある。

——眼高二十五米の軍艦の見張りは、視界良好なれば十哩半の見張半径で、その面積は三百一平方哩である。しかるに、高度六百米の飛行機からは理論上五十一哩の距離の水平線を見廻はすことが出来るから、その見張面積は八千六十三平方哩に達するのである。しかも尙ほ飛行機は著しき高さまで上昇し得るから、その視界も増大することは明かで、この數字は偵察索敵任務上、

飛行機が著しく艦船に優ることを證明するに足るのである。

しかし乍ら、こゝに注意すべきは、飛行機の能力は偵察素敵任務上無制限のものではない、といふことである。

第一に晝間の長短に制限せられる。何となれば飛行機の偵察能力は、夜間は軍艦のそれ以下に低下するからである。又、飛行機からの観測は、強い風壓のために妨害されて、前方の水平線を見るために双眼鏡を使用し得ないこともあり、尙ほ明るさが減ずるにつれ飛行機からの偵察は、その利點が減じ、夜になると状況は一變して偵察には軍艦の方が有利となる。次に雨天や降雪等のために視界が狭い時——又は強風の時には、飛行機の能力は軍艦よりもずつと減殺されるのである。

そこで、潜水艦の發見に對してはどうであるか。これに關する列國海軍専門家の意見を左記してみよう。

先づ——飛行機より透視し得る水深に關しては、米國の某軍事研究雜誌に次の如き記事が掲げてあつた。

「飛行機は晴天に於て、千呎から三千呎の高度より、水面下百呎に於ける潜水艦の艦影を視認し

得るに過ぎない。これが理想的の状態に於ける最大透視深度である。そして曇天又は荒天の場合には、その深度二十呎から三十呎までに減じ、天候が一層險惡になると、僅かに水面上を認め得るに過ぎない」

これによれば——飛行機は、或る程度までは、水中深く潜航してゐてもこれを透視する事が出来るので、潜水艦にとつては無上の脅威である。然し、平時の演習等で限られたる海面に於て、必ず居ると判つてゐる潜水艦の所在を發見することは、さして困難ではあるまいが、戦時の茫茫たる洋上で、どの方向に潜航してゐるか判らぬやうな場合には、これを搜索することは、中々容易の業ではない。

却つて、潜水艦の方から先に飛行機を發見してしまふ事が往々にしてあるのである。この場合飛行機の機影と爆音は、潜水艦側に發見せしむる可能性を十分に與へてしまふのである。故に勇敢なる潜水艦長が、「飛行機恐るゝに足らず」と豪語するのも、あながち暴虎の勇のみではない。

英國海軍潜水艦首席監督であつたペーコン大將は、潜水艦に對する飛行機の効能に就て次の通り述べてゐる。

「余は、潜水艦が自ら重大なる不注意を犯さざる限り、飛行機を以てこれを撃沈し得る機會は決

して到来するものでないことを確信する。然るに飛行機の攻撃による潜水艦の亡失を報告されたことが少くなかつたが、吾人は同時に爆弾投下の効果はこれを明かにすることが甚だ困難であることを記憶せねばならぬ。即ちその附近に起る水柱の奔騰附近の識別の困難、潜水艦の迅速な潜没等は、皆この誤つた印象を残す種子となることを考へる必要がある。そして爆弾がその効果を現はすには、潜水艦の附近十五呎以内に爆裂することが必要である。

爆弾投下の精度より考察して、余は多くの場合潜水艦は僅かに一驚を喫するに止ると信ずる。但しこの恐怖を感じしめることが、既に潜水艦をして永く水面下に潜伏せしめ、その行動を遅延し、乗員を疲労させる等、その任務を妨害するの結果を惹き起すから、一種の効果あることを否定するものではない」

同大將のこの所見には、飛行機の對潜水艦威力を餘りに過小評價してゐる傾向が見えるが、前大戰當時の幼稚なる飛行機と精度の低い爆弾投下を基礎としたものであるから、これを以て今日の飛行機對潜水艦の戦ひを決定するわけにはゆかない。

然し、餘りにも飛行機の効力を過大評價する人々にとつては、ベーコン大將の所見は一參考となるであらう。

次に、米國の空軍萬能論者で有名だつたミッチェル將軍は、左のように云つてゐた。(その一部所見は既に述べたから、こゝには潜水艦禮讚の中より拾集してみる)

「今や空軍の下に、總ての水上艦船はその存在を失ふに至つた。けれども獨り潜水艦のみは存在の理由を有してゐる。何となれば飛行機の行動力の及ばぬ海上では、國防作戰の任務をこれに託さねばならないからである」

この言葉は、明かに潜水艦のみは、制空權の圏外にあることを實證してゐる。又、同將軍は、かうも述べてゐる。

「空軍は如何なる種類の軍艦と雖もこれを撃沈又は破壊することが出来るので、これ等に對して絶對優勝の地位にあるものといふことができる。そして空軍のこの方面に於ける發達は、年を逐つて益々顯著なものがあらう。然し潜水艦に對しては殆んど効果がないから、將來の海戰に於ては潜水艦の使用が益々増加することと思ふ」

空軍は如何なる種類の軍艦と雖もこれを撃沈することが出来る——この點は大いに賛成である。わが海軍航空部隊の猛攻に遭つて、英國の世界に誇る不沈戦艦も敢へなくマレー沖の藻屑と

化したではないか。

又、米國のフヒスク少將は今大戦勃發以前、よく次の意見を強調力説してゐた。

「敵の侵略に對してヒリツピン群島を防衛するには、機雷及び潜水艦によつて支持せられる有力な空軍を備へれば十分である。要塞の如きはその要を認めない。又、防禦用の戦艦も全く不用である」

こゝで筆を戻して、――

雨天降雪、強風の時には、飛行機の能力は軍艦よりもずつと滅殺されることは前述の通りであるが、然らば、潜水艦の偵察索敵能力はどうであるか。

前大戦の時、戦略的偵察のため、獨、英海軍共に、北海の戦場に於て盛んに潜水艦を用ひて良果を收めたことは、一般識者の記憶するところである。

潜水艦は、概して敵に發見される恐れが少く、且つ攻撃を受ける機會も少く、終日敵國の沿岸に出没して附近の交通状態を偵察することが出来るのであつて、この利點は水上艦艇では、とても及ばないところである。

但し、潜水艦の戦略的偵察を完全に遂行するのに、唯一つの不利な點がある。それは、その眼高が低いために、敵を發見することが困難なことである。しかるに今日に於ては、この缺點は飛行機の協力によつて除くことが出来たのである。即ち、甲板に固定装置を設けた小型飛行機搭載潜水艦の建造を見るに至り、既に今次の大戦では、これ等が活躍してゐるようである。かくの如き飛行機は、敵に發見せられないで遠い海面を渡り、敵岸近く運ばれ、適當なる海面より飛揚し――潜水艦の觀測眼高を任意に高むることが出来る。

かゝる飛行機と潜水艦との協力によつて、近代海戦に於ける――飛行機及び潜水艦の重要性は飛躍的に増大したのである。そして、兩者の偵察索敵任務上一層有効となつて來た。

クレীগ大佐の講演中にもかう云つてゐる。

「潜水艦は、遠距離偵察用として確かに價值がある。これが飛行機と協同作戰を行ふに及んで、益々効果が大きい」

最早今日、潜水艦と飛行機と協同して作戰すべきものであることには、全く議論の餘地はないのである。

要するに――潜水艦と飛行機とは、その性能が正反對ではあるが、しかしこれが互に協力して

敵に當るとなれば、その短所缺點を補ひ合つて、獨特の威力を一層發揮し得るのである。かくて潜水艦の最も脅威とする飛行機も、味方とすれば亦この上なき助力者である、と云ひ得るのである。

以上によつて、制空權と制海權及びこの兩者に對する飛行機及び潜水艦の位置といふものが、概略お判りになつたことと思ふ。

制空權下の救助作業

潜水艦が、敵の制空權の圏外にあることは、前述の通りであるが、こゝに敵機及び敵艦艇の來襲可能性ある海面に於て、悠々水上に艦體を現はし、救助作業に従事した一潜水艦がある。いかに潜水艦が制空制海權の外にあり、水層と云ふ無類の防禦物を有するとは云へ、これは餘りにも勇敢極まる行動と云はねばならない。

本春〇月〇日——遠く敵陣間近くに索敵中のわが〇〇潜水艦は、不幸敵機の來襲に沈没した輸送船〇〇丸乗組の陸兵〇〇名をたまたま洋上に發見したのであつた。

そして——敵制空權下の危険に曝されながら、半日にわたつて救助し、世界戦史に類例なき、潜水艦による漂流者救助に成功したのである。

この事實は、日本潜水艦が——潜水艦の最大の敵たる飛行機をも怖れず、如何に勇猛果敢に行動してゐるかを最も如實に物語るものでなくて何であらう。

以下は、同潜水艦の驚歎すべき救助作業の狀況を描いた某海軍報道班員の手記である。

「偶然にもその日は潜航をやめて、晝頃〇〇潜水艦は水上航走に移つたのであつた。周囲の海面に浮流物が流れてゐる。この邊で船が沈んだと思つて居ると、突然見張員が「アツ人間がゐます」と聲をあげた。「味方です、陸軍です」との報告だ。次第に漂流者の數は増してゆく。

この敵の制海權下で水上に漂泊し、ハッチを開いて救助作戰にあたるのは、求めて危機に飛込むやうなものであるが、わが陸軍を見殺しにすることは絶対に出來ないと決心した艦長は、とにかく出來得る限り救助せよと「溺者救助用意」を下令し、こゝに敵機の攻撃に對し、身を捨てゝこそ浮ぶ瀬もあれとばかりに、半ば艦の運命を賭して決死的の救助作業を開始したのだつた。

水上艦艇ならば端艇をおろして容易に迅速に行はれる作業も、潜水艦では自艦を一々操縦し、

少し遠ければその場に回頭して接近して行かねばならぬので、僅かの風やうねりのために妨げられて作業は捗らない。水平線内見渡す限り、點々と頭が浮び遠くは日の丸を振り、近くは「オーイ〜」と叫んでゐる。板切れにはしつかり銃をく〜りつけ、死んでも兵器を離さぬ不屈の陸軍魂が、どうしてわが潜水艦魂にうつらぬことがあらう。感激した乗員の心は一刻も早くと逸やるばかりだ。

暮れるに早い南海の陽は、次第に傾いて來た。遂に「綱を持つて飛び込め」と號令は下つた。待つてゐましたとばかり、元氣な下士官が飛込んで、散在してゐる溺者に、綱や救助浮標を持たせた。綿のごとく疲れ果て、舷側を上れぬのを引張りあげ、押上げへなく〜と甲板に倒れかゝるのを叱咤して元氣をつけた。服も體も眞黒になつて、彼等の階級もわからない。「外に戦友が、戦友が」と四十時間も漂流してゐた苦しい息の中から、美しい戦友愛を吐露する陸兵の聲に、思はず乗員は泣いた。これでこそ日本は強いのだ。

かくて夕闇迫る頃までに視界内にあつた者は皆救助された。

晝食もとらず、半日にわたつて必死に續けた作業を終へ、いま蘇りゆく陸兵を見た乗員は、疲労も空腹も忘れて、互に無事なるを慰め合ひ、ともに語るのもたゞ涙あるばかりであつた。救助

された○隊長は、はからずも航海長の兄がその○隊長の教育を受けたといふ奇縁に、思はず二人はひしと握手をした。さらに○○一機曹○○二機曹も、従兄弟を發見し、天佑神助はそれからそれへと話題を生んだのであつた。

救助したものゝ乗員のみですら居住の不自由な潜水艦へ、○○名の救助者が收容されたのである。艦内は、恰も芋洗ひのごとく身動き出来なくなつた。士官室以下ベットをあけて救助者をゆつくり休ませ乗員は發令所や機械室に假眠、その回復を祈りつゝ、○日後○○基地に入港したのであつた。

潜水艦に絡る興味ある奇譚集

發達の歴史

先づ話の順序として、潜水艦發達の歴史を概略述べてみようと思ふ。——水中を潜つてこつそりと敵陣に近付き、これを攻撃しようといふ着想は、随分昔からあつたものらしく、歴史に残つて居るのでは——既に紀元前二百三十二年有名なアレキサンダー大帝が、敵の意表に出て水中戦争をやつたと云はれてゐる。餘り古いので、その眞偽は不明であるが、とに角思ひ付きだけはあつたと思ふ。

水中を潜る船を最初に作つたのは、西曆一六二四年(五百十八年前)に、オランダのホルリン、ドレーベルといふ人が、木船の外側に革を張つて水が中に入らない様にして十五呎の深さに數時間潜行したといふことである。機械がおくられてゐたので、十二人が水中を漕ぎ廻つてゐたのである。

今日の潜水艦と略々同じ原理の潜水艦、即ちタンクの中へ水を入れると潜行し、これを高壓空氣で吹き出すと水面に浮き上るといふ潜水艦を一番初めに考案したのは——米國のブツシユネルといふ人である。當時は、小海軍國だつた米國が、大海軍國の英國に對抗するにはどうしても潜水艦以外には手がなないと感じて、苦心に苦心を重ねた揚句完成したのは西曆一七七五年(百六十七年前)のことである。然し當時のものは、水甕のやうな堅長い形をした一人乗りの、極く小さいもので、獨立戦争の時使つたけれども大して手柄を立てることが出来なかつた。

潜水艦が、初めて實戦に利用されたのは、米國の南北戦争の時からである。この時活躍した南軍の潜水艦ダビット號の成功は、永く世界潜水艦史上に輝くものであらう。

然し、今日の如くその内容は整備もしてをらず、數名が木製の潜水艦に乗り、火薬をつめて北軍の船底にもぐり込み爆發させたのである。當時は勿論乗員が壯烈な自爆をしたのである。

明治二十年頃に魚形水雷が英國に於て發明され、潜水艦日露戦争の時に米國で完成されたのであるが日露戦争では、兩國ともこれを實戦に使ひたいと思つたのだが、遂に間に合はなかつた。ところが露國は、わが國が盛んに潜水艇を驅使してゐるだらうと思ひ、旅順港に於て、マカロフが戦死したのも、日本の潜水艇に撃沈されたのだと信じ、當時はビール瓶や木片までが、みんな潜水艇ではないかと大いに敵の心膽を寒からしめたものであつた。今日から考へれば、まことに

笑止千萬な話であるが、實は未だ實戦には間に合はなかつたのである。この間の消息は——四十年間不斷の猛訓練の章で述べた通りである。その後、米國から買つて來て、私の勤務した第五號艇等が出來、非常に有効であると判つたのである。

それまで獨逸では、科學の進歩が大變遅れてゐたのであるが、列國の知らぬ間に漸次擡頭して、前大戰の時には獨逸潜水艦の戦果は世界を驚倒せしめたものであつた。大戰終期に於て、獨逸は新式潜水艦五百隻を作つたのであつて、當時日本海軍は獨逸潜水艦の長所をとり研究を積んで今日見る如き日本獨特の無敵潜水艦を作るやうになつたのである。この潜水艦の發達に伴つて、潜水艦として必要な各種の機械類、魚雷、機雷等の攻撃兵器や、潜望鏡、通信機具その他、各種の科學兵器が發明され、こゝに潜水艦は急速なる進歩を遂げて、今日太平、大西、印度の三大洋を縦横無盡に暴れ廻る——恐るべき海軍兵力の一つとなつたのである。

龍宮船の構想

わが國に於ても、外國人に負けず寛政年間(西曆一七九〇年の頃)に、能島流水軍では——龍宮船といふ一種の潜水艦を考へ出してゐる。この時代は、既に外國で幾多の潜水艦が發明せられた

後ではあるが、然し當時わが國でもかゝる獨特の考案の設計せられたことは、大いに意を強ふするに足るものと云はねばならぬ。

この龍宮船とは、一體どんな構想に基くものか。左に——わが海軍兵學校の教育參考館に陳列してある本邦古來からの船の模型や繪圖の説明中の一文より、それを抜抄してみよう。

「龍宮船の圖」

能島流又は一品流水軍に於て、奧秘として一子相傳的に相承し來りたるものを、寛政年間に寫し取りたるものなり。説明の部に、「敵陣に近寄り或は陣營の内へ海底を押し行きて龍頭を擧げて浮び出て炮録を飛ばし、干柄筒を打ちて又海底に沈み入り我陣に歸るなり」とあるのは、全然潜水艦の構想にして、古き時代に於て我邦に斯るものを考案したるは極めて偉とすべきなり。

船底に權鈴を附して之を上下することによりて或は沈み或は浮ぶ、龍頭には穴を穿ち、水晶を嵌入してテレスコープとし、之れを以て方向を知る如く工夫せり。又左手に圖解せられたるは船蓋にして之れを船體に被覆して密閉し、内部にては燈火を點して用を辨じ、又磁石を以て方向を知り或は蠟燭を以て行程を知りたるが如し、然れども如何にして水の侵入せざるやう工夫したるか、又如何にして空氣の流通を計りたるかは、口傳として記述することなき故之れを知るに由な

し。而して船體兩翼にある車輪を以て進行し、前後に附屬する楫板を以て方向を調節せしものなり。船體の長さは約一丈三尺先づ全體に松脂を塗抹し、その上に保護色として青色の漆を塗り、下腹部のみを赤色にせり。

惟ふに西洋に於ても潜水艦の發明發達は極めて最近の事實に屬するに拘らず、我國に於ては古き時代より少くとも寛政以前より、現時の潜水艦の構想と符合する如きものを考案し居たることは、我邦人の發明的才能の決して他國に劣るものにあらざることを證明すると同時に、我邦人の得意とする奇襲的戦法を以てする果敢なる攻撃精神の躍如たるものあるを見るに足る。

但し本圖の如きものが果して實用に供せられたるか否かは尙傍證を要するのである」

この龍宮船の外に兵學校參考館には、——村上水軍の使用せし軍船の模型がある。その説明は次の如きものである。

「普通兵船の船底に長方形の穴四個を穿ち、之れより海水を侵入せしめ、可及的船體を海中に隠蔽して敵船に近づき奇襲を行ふためのものなるべく、その着想は全く潜水艦の元始的構想なりと

考へらる。各穿孔には體臍つばなを附し、之れに體を嵌挿して前後左右何れの方向にも動き得る如く工夫せり」

又、わが海軍潜水學校には「うつろ船」といふ船の模型があり、これには頗る興味ある説明書が添えられてある。その模型は、大阪府泉南郡佐野町の藤田健三氏宅に秘藏されてゐたもので、作者の年代等は不明であるが、同家は代々庄屋を勤め、岸和田藩中七人衆として格別の役であつたと云ふ。從來極めて内密にこれを保存し、その由來の如きも秘して傳へられなかつた。

そして同家祖先の作とすれば、人物環境等の關係上、元祿八年（一六九六年）から寛政十一年（一七九五年）までの間のものと想像し得られるが、確實なところは明白でない。

その説明書に曰く、——

- 一、鉛錘を釣し、錘素を伸縮して浮沈す。
- 一、司令塔に相當する物見臺を有し、その下部まで沈下し、上甲板を水面下約一尺に沈める。
- 一、川口または淺水の敵航路に伏せ置くので船底の孔より槳を出し、多少の移動が出来るだけ

である。そして橈の貫通部はなめし皮を以てこれを水密に保つ。

一、注水排水に關しては記述してないが、内外船殻の間を、現代潜水艦の如くバラストタンクに使用したものと思はれる。科學の程度幼稚なりし時代に於いて既に、複殻を考案したことは眞に注目に價する。

——今から百五十有餘年前に於て、既に現代潜水艦の構想と符合するが如きものを考案してゐたことは、まことに驚歎の外はないのである。

發明動機を巡る一挿話

今日の潜水艦と略々同じ原理の潜水艦を、一番初めに考案したのは、ブツシュネルであることは前に書いたが、もつと詳しく書けば——彼は米國エール大學々生ダビット・ブツシュネルと云ふ政治的野心家であつた。と同様に又、頭腦緻密なる科學者であることは云ふまでもない。

ブツシュネルの潜水艦發明に關して、米國シムス少將は、その著書「海上の勝利」の中で左の如き興味ある記事を掲げて居るから、こゝに引用することにしよう。

「彼こそは實に、近世潜水艦の發明家と云ふべきである。同氏の潜水艦タイトルに就て、曾て英國の海軍造船部長であつて斯界の最權威たるサー・ウイリアム・ホワイト氏の云ふところによれば、

(ブツシュネル氏以來、設計のいかなる新原則も發見せられ又は應用されたものはない。彼は總ての後繼者にその方法を教へた。勿論實質を改良すべき他の方法は發見せられ、實際に之を實驗したことはあつたれども、結局ブツシュネル氏の計畫は大體に於て最良なものであることが分つた)

と云つて居る。ブツシュネル氏のこの發明の動機は、大英帝國に對して敵意を挾んだもので、當時英國には内亂が起り、一七七七年に發明せられた氏の潜水艦は、米國の沿岸に碇泊中の英國軍艦を撃沈し、叛亂を起した植民地と母國との交通を斷ち、米國の自由を得るのが目的であつた。氏が、この大望を懷いた冒險に於ては遂に成功しなかつた。唯余が茲に力説せんとする一事は、彼はその潜水艦を以て劣勢海軍國たる青年合衆國のために、大英國から海上の獨占的管制權を奪取し得べき武器だと信じたを云ふことである。

彼の後繼者フルトン氏も亦同様の大望を抱き、一八〇一年彼はその潜水艦ノーチラスを以てプ

レスト港で一商船を爆沈した。この演劇的實例は、ナポレオンをして英國艦隊を撃破し、その海上の管制を奪取すべき一法であると信ぜしむるに至つた。そこでフルトン氏は去て英國に至り、その潜水艦を時の首相ウイリアム・ピット氏に示したところ、彼は之に對して、

(吾人若しこの種の戦闘方法を採用したなら、それは全世界の海軍を全滅するに同じであらう)と云つた。この先見に拘らずピット氏は之を時の海相セント・ビンセント氏に送つたところ、

この英國の全勝海軍の首長は奮然として云ふやう、

(世にピット程馬鹿なものはない。彼は抑も如何なる理由の下に海上の管制を握つてゐる吾人に不必要な斯種の戦闘方法を推奨せんとするのであるか、若し此方法が成功したならば、吾人は制海權を奪取せらるゝではないか)

と、而して——フルトン傳の著者の云ふところによれば、英國政府は莫大なる金額を與へてその發明になる潜水艦を米國に持歸り、爾後之を斷念するやうに勸めた。同書にはグランビル卿に送つたフルトン氏の手紙の一節を掲げてある。即ち、

(一年二萬磅では御希望に應ずるを得ず)と。

近世のあらゆる海軍國に於て、標準となつた潜水艦の型式を設計したのは、ジョン・ビー・ホールランド氏である。氏も亦、英國海軍を全滅せしむべき唯一の方法として之を推奨した。氏は愛蘭種の米人であつて、フェニアン兄弟商會の一員であつた。これ即ち氏の潜水艦にフェニアンラムと命名した所以で、固より全然衝角を有して居ないのである。

要するに——米國の潜水艦發明の動機は、英國海軍を目標としてゐたこと、又、英國が米國のそれを恐れてゐたこと等々、シムス少將の筆は、その間の消息をよく傳へてゐる。

鯨を潜水艦と思ふ

廣漠たる洋上で潜水艦を發見することは、仲々容易なる業ではない。そしてその存在を豫期する海面を航行する艦艇の見張員は、何時撃沈されるやも測られざる不安憂慮の念と、何一つ見落すまいと緊張し切つてゐるため、往々滑稽極まる見誤りを演ずることが少くない。

そこで、波間に出沒する浮木や破片も潜望鏡と見え、遠距離にある帆船も假想せる潜水艦と怪しまれ、夜間水中の鱗光は魚雷の航跡かと疑はれ、難破船の漂流物が司令塔と見誤らるゝことなどは、決して珍らしきことではなかつたのである。

それだから、曾て米國の驅逐艦は、英國近海で數發の爆雷を投下して、鯨を斃したとさへあつたのである。

鯨で思ひ出したが、米空母レキシントン號を撃沈したわが〇〇潜水艦が、出陣の血祭に鯨を眞二つにしたといふ話がある。當時の様を同艦一乗組員は次のように語つてゐた。

「あれは、實に氣持がよかつた。私共が出發して南方作戦に臨む途中、いきなり何物かに衝突した。何だらう？ と調べてみると、これが鯨です。わが潜水艦の力餘つて鯨は見事に眞二つになりました。これは幸先がいい、鯨を血祭にあげたのは、必ず敵艦をやつゝける前兆だと云ふんで皆でお祝をしました。果して南方で御存知のやうな戦果を収めたわけです」

怪奇U31號の死因

歐洲大戰中UC五十五號の乗組員であつた——獨逸豫備少尉ハーバート・ザウエル氏の著書に左の一節が記されてゐる。

「一九一五年の半ば頃、わが潜水艦の一隻が無傷のまま敵に捕獲せられた。當時その原因が解ら

なかつたが、敏腕なる一通信記者は遂にその真相を探知してこの謎を解いてくれた。その潜水艦は、敵の追跡を逃れると同時に、新鋭の氣を養つて活動せんが爲に、北海の眞の只中に於て海底深く沈坐して乗員の休養を計つてゐたのであつた。

その時艦内には、二人の水兵が二時間交代で當直をしてゐた。その任務は非常の場合に警報を鳴らして乗員一同を戦闘配置に就かしむる外、艦内の空氣を清淨にするために半時間毎に唧筒を運動し、且つ酸素を補給するのであつた。元來、酸素は笑ひ瓦斯と同一の性質を有し、餘り多く吸入し過ぎると陽氣になつて自分の様子の變ることに氣がつかず、そして遽かに疲勞を覺えて眠り込むのである。

謂はゞむしろ、感覺を失つてしまふのである。更に一層長く酸素を飽和した空氣の中に居れば無意識の中に遂には眠つたまゝ不歸の客となるのである。かくの如きことが、この潜水艦にも起つたに相違ない。

當番は、恐らく酸素を補給する目的で、容器の嘴子を開いてうっかり忘れてゐたか、或は疲勞の極假睡してゐたか、とにかくその儘之を閉づることをしなかつたのであらう。そこで空氣が酸素で飽和されて彼等自身は意識を失ひ、又戦友も眠つたまゝ、この瓦斯を吸入して、確かに何等

の苦痛もなく窒息したものと認められるのである。斯様に、乗員一同死に絶えて久しく海底に潜んで居たから、母國では——出動後歸還せず、と定り文句で之を失踪と見做し、他の行方不明の仲間に加へて置かれたのである。

ところが、壓搾空氣を貯へた氣蓄器のバルブは絶対の氣密でないから、時日を経るに従つて漸次漏氣してバラストタンクの水を排出し、ために船體は徐々にその浮力を増して、遂に水面まで浮上したのであらう。そして風や潮のまに／＼漂流を續けて、乗員の死後二ヶ月の後英國のグレートヤーマス沖の沙洲に乗揚げたのであつた。そこで、之を港内に曳入れて艦内を調査すると、乗員はさきに休養に就いた時と同一の状態で、再び覺めない永久の眠に着いてゐたのを發見したのであつた。そして不思議にも、その死體は少しも腐敗してゐなかつた。

この潜水艦は——U三十一號であつた」

海底から來た男

米國式聽音機Cチューブといふのは、水中に於て十五呎乃至二十呎の鉛管を船體に沿ふて裝備し、これに針金を附し、その一端に聽音機を、他端に受聽器を取付けてある。

このCチューブを裝備したる一英國驅逐艦が、敵の潜水艦を追跡して爆雷攻撃を行つたが、その効果がどうであつたかを確かめることが出来なかつたので、熱心にその附近を捜し廻つてゐたところが、神経を緊張して受聽器を耳にしてゐた聽音手は、突然これまでに聞いたことのない異様な音響を感じた。次で激しい震動を覺えたと思ふと、意外にも海豹のやうに丸濡れになつた一人の背の高い獨逸人が、驅逐艦の舷側に現はれて來て、兩手を舉げて、

「兄弟よ」

と叫んだ。

これは、さきに爆沈された潜水艦の乗員であつて、如何にして艦内から脱出したかは彼自身も知らなかつた。とに角、暗夜の海中にもがいてゐるうちに、ふと聽音機に觸れたので、これを手繰つて遂に水面に浮び出て、一命を全ふすことを得たのであつた。

後——この話を、米國士官に報じた驅逐艦長の書信の一節に、こう云つてあつた。

「吾々は、米國の聽音機の新しい使用法を發見した。即ち溺死せんとする潜水艦乗組員を救助することが、それである」

魚雷の太屈曲

アイルランド海の入口を哨戒してゐた米國潜水艦七隻中のAL二號は、一週間の苦しい任務を終つて根據地へ歸航しつゝある時、偶々潜望鏡を間近かに發見したから、直ちに之に向つて魚雷發射の準備をなした。すると忽ち、恐るべき爆音が起つた。

それは、たしかに敵潜水艦が何等かの災厄に遭遇したに相違なかつた。そこでAL二號は、水中聽音機を以て敵の動靜を探つた。然るに推進器の音によつて察すると、敵は水面に浮上せんと努めて居るが、如何にも困難してゐるやうであつた。又、時々僚艦に向つて救急信號を發するの音が聞えた。

英國海軍の公表によれば、同方面に活動せる獨逸潜水艦は踪跡を失して本國に歸還した様子がないから、多分最後の運命に陥つたのであらうといふことであつた。けれども米國潜水艦隊司令グラヂー中佐の意見によれば、

「敵潜水艦は先づAL二號を認めて之に魚雷を發射した。ところが、この魚雷は往々にして起る大屈曲の爲に、發射艦の方に反轉し來つてそれに命中したものならん」

と云つてゐる。又、或る人は、

「同方面に二隻の潜水艦があつて、米艦を目がけてその一隻より發射したる魚雷が、目標を逸して味方を仆したものであらう」

と、説明してゐる。その何れが事實なるやは知ることが出來ないのである。

武俠の潜水艦長

潜水艦の行動は、その指揮官の性格によつて、それ／＼の特徴があつた。或る者は大膽且つ無頓着に振舞ひ、或る者は至大の注意を拂つて慎重に事に臨み、或る者は卑劣野蠻なる行爲を敢てし、或る者は武俠寛仁の態度に出るといふ風であつたから、艦長個人の性癖を研究すれば、その行動によつて艦名を推知することが出來たのである。

曾て、米國護衛艦の一士官が、

「ハンスがまた出て來たぞ」

と云つた。このハンスと云ふのは、米國沿岸に遠征して世人を驚かしたU五三號の艦長ハンス・ローブをさしたものであつた。彼の行動は獨特であつて、突如として出現し、迅雷耳を掩ふ

遠なき有様で攻撃に次ぐに攻撃を以てし、立どころに敵艦五、六隻を撃沈し、又忽然として姿を
没してしまふのである。これが、彼の遣り口であつた。

そして、彼の特性は聯合軍の護衛艦仲間にはお馴染となつて居た。且つ彼は、非常に勇敢決死
的の男であつたのみならず、常に禮節を失はぬところに、敵ながらも一般に尊敬の意を拂つてゐ
たのである。即ち船舶を撃沈するや、乗組員が總て救助艇に乗り移るのを附近で待合せ、これに
糧食飲料を與へて曳航し、獨逸驅逐艦が水平線上に現はるゝに及んで、曳索を放ちて急に潜航し
去るのである。

この慈仁的行爲は、——潜水艦にとつては實に危険千萬の仕事であつた。

又、曾て米國驅逐艦チャコブ・チョンスと出會したるとき、全く僥倖とはいへ二溼の遠距離か
ら砲撃を加へて一弾を命中せしめ、續いて魚雷を以て之を撃沈したのであるが、沈没が餘り速か
であつたため、救難信號をなす違もなかつた。

そこで、彼はこれに代つて——S.O.Sの無線電信を發してその艦位を報告し、乗員は端艇に
て洋上に漂つてゐることを、クエンスタウン根據地に打電したのであつた。かくの如く——義侠
に富んだ艦長であつたから、平和克復後に於て、聯合國の士官中には、彼と手を握つて語り合ふ

ことを望んで居たものが多かつたといふことである。

これを、大東亞戦下米國潜水艦が丸腰に近い商船のみを狙ひ、又抵抗力なき漁船に鬼畜の機銃
掃射を加へたりする非人道行爲と比較するとき、もはや評する言葉を知らぬのである。

潜水艦と香水

これは、奇譚ではないが一寸面白いと思つたので、本章の最後に加へることとした。今やわが
無敵潜水艦は、世界の三大洋を制壓しつつ、英米艦隊を震ひ上らせてゐるのである。

次に掲げるものは、わが〇〇潜水艦乗組みの某軍醫中尉の手記であるが、忍苦の潜水艦生活の
一端が、よく現はれて居ると思ふ。

「——(前略)——乗員の最も楽しみとするものは、夜の食事である。おしる粉、うどん、ビスケ
ット、ミルク、ココア、紅茶等である。全く陸上生活者の思ひも及ばぬ珍味となるのである。
「今晚の食事はなんだ」

と、主計兵にきくのが、いかにもうれしい日課の一つであることを考へて貰へば、思ひ半ばに

過ぐるものがあらう。潜水艦生活と云ふものは忍苦そのものといつてもいい。

又、楽しいものゝ一つは、故國の便を傳へるラヂオ。〇〇沖で、海外ニュースの時間には狭い機關室の通路に乗員が詰詰となつた。

そして大戦果の報を耳にすると、われ／＼の云はゞ縁の下の力持にも似た努力がその大きい戦果の一役を承つてゐるのを知つて、思はず萬歳を叫んだものであつた。

太平洋の眞只中ほど、故國の人の聲に、限りないなつかしさと思慕の情を起すものである。子供の時間に無心に童謡を歌ふ幼児の愛らしい聲には、髯だらけの勇士も思はず身のどこにあるかも忘れて、思はず微笑するのである。目に入るものとしては水、鳥、飛魚ぐらゐのもので、幾十日ぶりに故國よりの勇壯な行進曲や、尊い君が代の莊重な調べは、實に私達の魂を打ち、又、一方吾々は重い使命を擔つてゐるのだといふ強い自尊心を昂める。

ラヂオに次いで楽しいものは、讀書である。單行本、雜誌、パンフレッド。なんでもむさぼる如く讀むのである。ある従軍記者の話によると、一番理想的なのが、まづ長さが六十四頁位の著書で、彼氏と彼女が主人公で、戀愛、葛藤、喜悲交々としてめでたしくである。六十四頁といふのは極めて限られた時間に讀み終るに相應はしい長さをいふのである。艦内の高温と多濕がそ

の程度の讀書よりゆるさないのにもよるので、軽い讀物が要求されるのである。戦争といふ餘りに偉大なる經驗が吾々の頭腦の嗜好を變化させるので、決して吾々が讀書低級階級に墮したわけではないことをお断りして置く。

戦線にあつて——香水——といふと妙に思はれると思ふが、先づ以下の文を讀んで頂かう。

私は「香」と題するフランス作家のコントを讀んだことがある。それは相愛の男女の婚約を許さぬ頑固爺さんに、老人の若かりし頃によく用ひた香によつて青春時代を蘇らせ、遂にその香りによつて若かりし頃の思ひ出に耽らせ、まんまとめでたしくに落着くといふコントである。

吾々は潜水艦内の、陸上生活する者の思ひも及ばぬ、あのむつとする悪臭、汗と垢と、汚れた衣類に染み込んだ一種異様な匂ひ、それをこの香水の香りによつて、一掃することの出来るのは實に想像の外の喜びである。同時に吾々の嗅覺は吾々の胸をときめかせてくれる。

〇〇海戦から歸港して恤兵品として、はじめて手にした二函の香水。この時の乗員の喜びは全く有頂天といつてよかつた。——野ばらや椿、谷間の姫百合、鈴蘭のあのやさしい香りが汗の臭ひに充滿する艦内に氾濫した。

「贅澤は敵だ」ではあるが、せめてこの艦内にさゝやかな贅澤の餘裕があつていい。

この手記によつても、如何に前線將兵が讀書を唯一の楽しみにしてゐるかゞ判るのである。諸君はこの點に留意して、單行本、雜誌、パンフレッド類をどしどし慰問袋に入れるよう心掛けねばならない。そして、潜水艦乗員向きには、頁數の少い軽い讀物であることを記憶されるよう、この機會に諸君にお願ひしてをく次第である。

列國潜水艦乗員の養成法

採用と養成に就て

潜水艦の勤務と乗員の資格に就ては、既に第三章の——乗組員の歡喜と勞苦、のところで述べた通りである。

そこでこゝには、列國海軍の潜水艦乗員の採用と養成法に關して、筆を進めてみたいと思ふ。

(日 本)

わが海軍に於ける潜水艦乗員は、最初は志願者の中から——身體強壯品行善良のものを選抜する規程であつたが、その後必ずしも志願者のみに限らず、適任者と認めるものを任命せらるゝやうになつた。しかして在役潜水艦に配乗し實地の教育訓練を主とし、旁ら必要なる學科を授けてゐた。また乗員養成の一法として、一時各潜水艦に二倍の定員を置かれたこともあつた。その後潜水艦建造の方針も一定し、續々新造艦が竣工するに至つたから、——大正九年九月吳軍港に海

軍潜水學校を設立されたのである。

海軍潜水學校の規程要領

一、海軍潜水學校ハ海軍將校、兵科及機關科特務士官准士官下士官兵ヲシテ潜水艦ニ關スル須要ナル實務ヲ練習セシメ之ニ對シ潜水艦ニ關スル學術ヲ教授スル處トス

海軍潜水學校ニ於テハ前項ノ外潜水艦ニ關スル研究及其教育ノ規畫ニ關スル研究調査ヲ行フ

一、學生練習生ノ資格

甲種學生ハ潜水學校乙種學生教程ヲ修了シタル者又ハ之ニ準スヘキ經歷ヲ有スル海軍少佐若クハ大尉ニ就キ潜水艦長トシテ其職ヲ遂行スルニ必要ナル學術技能ヲ修習セシム

乙種學生ハ海軍水雷學校高等科學生教程ヲ修了シタルモノ又ハ之ニ準スヘキ兵科尉官ニ就キ潜水艦乗組將校トシテ其職務ヲ遂行スルニ必要ナル事項ヲ修習セシム

機關學生ハ海軍工機學校普通科學生教程ヲ修了シタル機關科尉官ニ就キ潜水艦乗組機關科將校トシテ其職ヲ遂行スルニ必要ナル事項ヲ修習セシム

特修科學生ハ海軍將校兵科及機關科特務士官准士官ニシテ志願スル者ニ就キ又ハ特ニ必要ト

認ムル者ニ對シ潜水艦ノ職員トシテ必要ナル事項ヲ修習セシム

專攻科學生ハ海軍將校ニ就キ潜水艦ニ關スル事項中特ニ研究項目ヲ指定シテ之ヲ專攻セシム

練習生ハ水雷術電信術機關術電機術若クハ工術特修兵タルモノ、中ヨリ品行方正實務ノ成績

優良ニテ潜水艦乗員トナスニ適當ナル性能學力ヲ有スルト認メタルモノヨリ撰拔ス

一、學生練習生ノ修業年限左ノ如シ

甲種學生	三ヶ月以内
乙種學生	四ヶ月以内
機關學生	四ヶ月以内
特修科學生	本ヶ月
專攻科學生	一ヶ年
練習生	六ヶ月

一、潜水學校練習生ノ教程ヲ修了シタルトキハ修業徽章ヲ授與ス

その規程要領は、右の如くであるが、潜水學校には練習用の潜水隊が附屬して居り、實習に差支へないやうにしてある。しかして現今の潜水艦乗員は重に右學校の教程を修了したものである

から、いづれも學術技能に於て、他の艦艇乗員よりも優れてゐると云つてもよいのである。

従來、屢々、列國海軍當局では、日本潜水艦乗員の堅忍不拔、刻苦精勵の勤務振りを觀て神秘的なりと評してゐるが、各所に述べ來つたる如く、潜水艦こそは日本人のために造られたる如き新兵器と云ひ得るのである。それ程、愉安を好まず勞苦に就くの日本人的性格にびつたり合致してゐるのである。

潜水艦の如く浮力が小にして機構複雑のものにあつては、些細なる一人の過誤も忽ち一艦の安危に關する場合が少くない。こゝに乗員を選抜するの必要があるのである。前大戰當時、かの獨逸潜水艦乗員が艦隊の選良を集めたものであつたけれども、戰死者相次いでその補缺に苦しみ、遂にその活動を鈍ぶらすに至つたことは、識者のよく承知するところである。

今や大東亞戰下、わが潜水艦隊の重責は白と共に重且つ大となるばかりである。この秋に當つて、わが海軍が特に乗員養成の學校を有し、加ふるに幾多の特典を以て之が優遇と獎勵の道を講ぜられて居るのは、まことにその宜しきを得たものと信ずるのである。

青年諸君は、宜しく近代海軍に於ける潜水艦の重要性を認識して、自ら進んで大東亞共榮圈諸國の國防に挺身せねばならぬと思ふ。

私にかゝる青年諸君の一人でも多きことを衷心より希つて已まぬものである。

(英 國)

最初——潜水艦乗員は志願によつて採用し、その期間は練習期を通じて五年以内とし、特に許可せらるゝものゝ外如何なる場合に於ても、五年以上引續き潜水艦に勤務するを得ず、と規定してあつたが、一九二四年十一月から希望者以外にも潜水艦乗員を命じ得るやうになし、その乗組期間を三年と改めた。然るに一九二七年三月に再び三年が五年に延長されたのである。

乗員養成機關としては、ポーツマス軍港に海軍潜水學校があつて、教程は將校、准士官並下士官兵等數種に分れて居り、被採用者は學校に於て一年間必要な學科を授けらるゝ外、附屬潜水艦で練習をなしたる後、更に在役潜水艦に配乗して實地練習の上、卒業せしめらるゝことになつて居るのである。

(米 國)

潜水艦乗員は、最初専ら志願者から採用されたが、一九二五年以降は必ずしも志願者に限らず

普通艦艇と同様に配員せらるゝことになつた。

米國潜水艦長採用標準（一九二七年現在）

- 一、海軍工廠所在地以外の方面に行動し、且少くも六ヶ月以上開放検査を要せざる潜水艦に勤務すること一年以上たること
- 二、勤務精勵操縦能堪機械に對する知識を有し部下統御の才あり且つ潜水艦の兵衛的行動を了解しあること
- 三、一名の潜水隊司令及二名の斯道練達の士より成る調査會に於て適任と判定さるゝこと
- 四、軍醫官の身體検査に合格すること
- 五、一度潜水艦長として證明せられたる者は、不適任と認めらるゝまで有効なること
- 六、相當期間潜水艦以外に勤務せるものは、潜水艦長となすに先だち、短期間潜水艦勤務教育を授くること

——潜水學校は、ニューロンドンにあつて、一九一六年の創立である。學校の修業期間は六ヶ月で練習用の潜水隊が附屬してゐる。しかして學生練習生の採用は嚴重なるメンタルテストを経

ることになつてゐる。

米國海軍省で一九二九年六月末現在を以て、發表せる——下士官兵の配員中、潜水艦に關する分は左の通りである。

潜水艦	(第一線)	四六隻	一、七九四人
潜水艦	(第二線)	二九隻	八五〇人
艦隊附屬潜水艦	(第一線)	五隻	三九五五人
潜水母艦		六隻	一、七七一人

即ち右數字は、十四年前當時の潜水艦七十五隻（第一線と第二線で）に對する人員約二千六百有餘であるから、大東亞戰爭直前百餘隻の潜水艦を有してゐた米國の——下士官兵總數は、自ら想定し得るわけである。

(佛 國)

最初の規定によれば——潜水隊司令は潜水艦長たりしものから選抜し、任期を十八ヶ月、見習一ヶ月として居る。潜水艦長は任期十八ヶ月なれども見習は三ヶ月で、内一ヶ月は前艦長の指導の下に執務する。乗組將校の任期も十八ヶ月で艦長と同時に交代することはない。下士官兵は志願によつて特に選抜し、任期は本國に於ては二十四ヶ月、海外に於ては十八ヶ月である。しかし、今尚ほ本規定を用ひて居るか否かを詳にしない。乗員養成機關としては、一九一六年にツーロンに潜水艦練習學校が設けられた。

(伊 國)

海軍潜水學校は王國軍艦内に置かれ、實習のため必要に應じて、潜水艦や發動艇を附屬せしめることになつて居るが、修業年限その他は詳かでない。

今次大戦勃發以來、その熾烈なる活躍振りに見ても、その乗員養成機關の素晴らしき整備は容易に想像されるのである。

獨逸潜水艦魂

獨逸海軍潜水學校は、キール軍港附近にあつて、新たに就役する潜水艦の乗員は先づ學校に送られて、特に襲撃運動を修得することになつて居た。一九一八年九月——獨逸皇帝は本校に臨御せられて、

「朕は深く潜水艦乗員の忠勇なる犠牲心に信賴して祖國の危難を救はん」

との勅語を給はつた。そこで在校將校以下一同感激措くところを知らず、いづれもこれを今生の暇乞ひと覺悟しないものはなかつたといふことである。

前大戦中に於ける——獨逸潜水艦長の養成法には、わが海軍としても中々學ぶべき點が少くない。戦争中潜水艦の損亡の危険が、新たに就役したものに特に多かつたのは、その乗員が戦時の経験をふむことが少なかつた爲である。しかして敵の潜水艦對抗策の發達に従ひ、この危険が益々増大するのは必然であるから、之に對して採用された方法は、新艦長の候補者をして先づ經驗に富める現艦長と共に練習航海をなさしめることである。

然し、この制度は効果が確實ではあつたけれども、若しその潜水艦が遭難した場合には、同時に二名の艦長を失ふこととなつて、適當な艦長の缺乏に苦しんでゐる際、更に一段の打撃を蒙る

こととなり、加之單に一回の練習航海だけでは新艦長に對し多種多様の狀況に關し、完全なる理解を與ふることが困難である。

そこで一番適切なる良法としては、各潜水隊に商船の高等船員若くは操舵員を、いはゆる戦時水先案内として、採用することであつた。これは、その後引續き甚だ有効であつたことを示してゐる。この水先案内は、初め熟練なる潜水艦長に就て、敵國船舶の航路に關する知識殊に中立國汽船と敵國との判別に關して指導を受け、その後從軍數回を重ねるに従ひ、いよ／＼習熟して、新就役艦長に對して有益な助言者となすことを得るに至つた。そしてこれ等勇敢なる水先案内者中には、——有名なる潜水艦長と共に、ひろく人口に膾炙するものも多く出で、中には三百六十日に達する遠征航海記録を作つたものもあつたといふことである。

こゝに今更、獨逸潜水艦乗員の優秀性を喋々するまでもなく、今次大戰以來の赫々たる大戰果がそれを立證して餘りあるが、——獨逸潜水艦精神とは何か、それを簡潔に要約してみたいと思ふ。

——獨逸潜水艦の乗員は、前にも述べた如くに、全艦隊中から選抜されたる最優秀者のみである。しかして艦長と乗員とは、日夜同心協力して危難を凌いだので、忽ちの間に最も親密なる團

結心と強固なる信頼心とが養成された。又、成功したる事業に對する誇りは、益々任務を欣ぶ觀念と作業心とを高めたのである。

かくて四ヶ年に亘る長き戦争期間を通じて、何等變るところがなかつた。實に獨逸海軍の崩壊後も——潜水艦乗員の忠實心は依然として存續して居たのである。故に、かの一九一八年十月の不幸なる日に於て、大艦の乗員が出港を拒んだ秋にも、潜水艦隊のみは遠く敵國沿岸に出動して勇敢なる攻撃を行はんとして居り、母國諸港に於ける出來事が何の意であつたかを了解することも出來なかつたのである。

——この潜水艦乗員の忠實心こそ、爾來今日に至るまで獨逸海軍の傳統精神となり、且つは不撓不屈の潜水艦魂となつて、燦たる光りを放つてゐるのである。

今日、英米海軍が獨逸潜水艦の跳梁に顔色を失つてゐるのも、亦宜なる哉である。

最後に——列國潜水艦乗員の特典であるが、これは現時局下に於て、諸君にとつては餘り必要でないから省略する。

わが海軍に於ける潜水艦乗員に對する特典としては、——航海加俸の増額、恩給年數の加算、

公務の死亡傷痍者に對する賜金等に幾多の優遇が講ぜられて居るが、その詳細は省略することとする。

颯爽たり、潜水艦出撃

出撃命令下れば

今やまさに、第〇潜水艦は出撃命令を受けて、鬨志満々壯途に就かんとしてゐる。〇〇基地の小さな棧橋は、送る者送られる者の感激の嵐に包まれて、強烈な光りの中に喘いでゐた。作戦〇千漣、敵艦撃滅の決意に燃えて——潜水艦乗員の誰も顔が、薄く紅潮さへしてゐる。この感激の情景を、第〇潜水艦乗組みの某報道班員は、次のやうな達筆で現はして居る。

艦長に挨拶をすますと、出撃用意のラツパが鳴つた。強烈な光りの下にわづかな日影を作つてゐたデッキの陽覆は取除けられ、椅子、小卓の類が小さなハツチから、敏捷に艦内へ運び込まれると、當直員はすでにそれらの部署へ走つて非番員だけが左舷デッキに整列した。

棧橋には司令官はじめ休養中の戦友が居並んで、いづれも逞しい日焦けの頬をほころばして見送つてゐるし、その背後には重りあつた入道雲が、家並の上からむつくりと背伸びをしてゐる。

やがて艦橋に立つた艦長の手が振られ、それを合圖に艦がしづかに棧橋を離れた。

「帽を振れッ！」

母國出撃以來、まだ一度も床屋に出逢はぬといふ航海長の野太い號令で、左舷に居並んだ兵員は一せいに帽子を振り出した。陸でもすぐにそれに應へる。見送る者も見送られる者も、決して身綺麗な服装ではなかつた、髪は衿あしを蔽ひ作業服は油に汚れ、振る帽は痛ましいまでにちぎれてゐる。それでゐてどの顔も何と無心な明るさに微笑んでゐるのだらう。

もとく潜艦の乗員は下士官が多く、水上艦艇では古參に屬する一等水兵ですら、見習程度といふ選りぬきなのだ。その乗員たちが、この笑顔で、この破れ帽を振りあつて、平然と海の極みまで敵を求めて行つてゐる。

出撃は常に偉大な決意の別離だ。それでゐて何處に感傷のかけがあらう。何處に生死を煩ふ陰影があらう。あるのはたゞ、天皇に歸一を確信し得る者の素朴で無心な笑顔だけなのだ。

眺めてゐるうちに私の眼に、その振り合ふ帽子が故國の春に咲き競ふ櫻に見えだした。海と空との滴るやうな蒼さを背景にして、こよなく美しい櫻堤に見えだした（さうだ！この花から新しい世界が生れて來るのだ——）

その笑顔と笑顔が、舷側に噛み出される白い泡でみる間にぐんぐん隔てられて行く。

「帽止めえ」

再び、航海長の聲である。航海長の聲につゞいて、「潜航用意！ 總員配置！」怒號に似た艦長の號令がひゞき渡り、帽を振つてゐた乗員たちは、小さなハツチから蝗のやうに艦内へかくれていった。

——かくて、見敵必滅の闘志を抱いて、颯爽として一度び出撃すれば、遠く大洋の怒濤を蹴つて、一時間一分間の休みもなく、不斷の海底の闘ひを繼續せねばならぬのだ。諸君は、これ等潜水艦乗組員の聖なる姿を一時たりとも忘れてはならぬのである。

こゝに——開戦以來、昨年十一月末のルンガ沖夜戦に至る、わが潜水艦の擧げた眼に見えたゞけの戦果を並べても、次の如き素晴らしいものとなつて居る。

十二月八日、わが特殊潜航艇より成る特別攻撃隊のハワイ海戦に於ける大戦果を初めとして、翌九日には比島マニラ灣で米國軍用船（一萬五千トン）を撃破。一方馬來沖では九日午後、英國主力艦プリンス・オブ・ウェールズ及びレパルス兩艦が、シンガポールを出港して北上するのを

発見、航空部隊と極力搜索をつゞけ、十日朝再び確認、直ちに航空部隊へ通報し、かのマレー沖海戦に英國東洋艦隊主力撃滅の要因をなした。尙ほ通商破壊戦も次第に熾烈となり、十日、十四日の兩日南方洋上に於て、それ／＼大型敵船各一隻を撃沈すると共に米國本土沿岸並びにハワイ方面に戦果を擴大して敵海上交通に深刻な打撃を與へ、二十五日までに——撃沈船舶十隻（七萬トン）大破船舶三隻（三萬トン）損害を與へた船舶五隻（約四萬トン）の戦果を収めた他、三十日、ハワイ島、マウイ島、カウアイ島に砲撃を加へ、諸所の敵軍事施設に大損害を與へた。年が改まるや、潜水艦の活躍はいよ／＼激烈となり、一月八日にはジョンストン島の西南方洋上で米國水上機母艦ラングレー（一萬五千トン）を撃沈。十二日にはハワイ西方洋上で米國空母レキシントン（三萬三千トン）を雷撃、潜没中二回に亘る大爆發を聽音し沈没を確認したのである。

一方蘭印方面に出動中のわが潜水艦は、十五日までに敵船四隻（二萬七千トン）を撃沈。更にスマトラ、ジャバ方面に活躍して二十二日までに敵船十二隻（八萬八千トン）を撃沈した。この内譯は次の通りである。

一萬五千トン級一隻（大型武装商船）

八千トン級三隻（油槽船、商船、貨物船各一隻）

五千トン級二隻（輸送船、貨物船各一隻）

四千トン級二隻（商船、貨物船各一隻）

その他五隻（三萬一千トン）

三月に入ると——五日にはジャバ海方面で、敵大型驅逐艦一隻を撃沈。十四日には米本土沿岸カリフォルニア州の軍事施設を砲撃し、米國朝野の度膽を抜いたのである。

更に三月一日から八日までに、水上艦艇、航空部隊と協力してジャバ島の周邊海上並びに印度洋に脱出または救援企圖中の敵船五十二隻（二十一萬トン）を撃沈破し、その殆んど全部を覆滅し去つたが、又印度及びビルマ方面に出動中のわが潜水艦は十六日までに敵武装商船、油槽船十一隻（八萬一千五百トン）を撃沈した。

コロンボ方面——武装商船二隻（六千五百トン）、油槽船二隻（二萬トン）

マドラス方面——武装商船三隻（二萬四千トン）、油槽船一隻（七千トン）

ラングーン方面——武装商船二隻（一萬九千トン）、貨物船一隻（五千トン）

——かくの如く、わが無敵潜水艦は、開戦劈頭から赫々の戦果をあげて來たのである。

以下、重なる戦果を列記して、その戦局の推移を振り返つてみたいと思ふ。

- 三、三一——寶洋丸ニューブリテン島南方洋上にて米潜水艦と一騎打——撃沈 米潜水艦一
- ・開戦より五、一〇迄——潜水艦の敵船舶撃沈戦果——太平洋ハワイ方面撃沈一五(一〇一、七〇〇トン)、西南太平洋方面撃沈一五(九六、〇〇〇トン)、印度洋方面撃沈三五(二四六、三〇〇トン) 合計六五(四四四、〇〇〇トン)
- 五、三一——特殊潜航艇デエゴ・スワレス奇襲——撃破 英戦艦クキンエリザベス型一、英乙巡アレスーサ型一
- 五、三一——特殊潜航艇シドニー強襲——撃沈 軍艦一(わが方損害) 未歸還特殊潜航艇三
- 六、八より六、二〇まで——潜水艦米本土西岸シヤトル方面に活躍——撃沈 六、〇〇〇トン級一 七、〇〇〇トン級一
- 六、一より六、一八まで——潜水艦シドニー方面活躍——撃沈 二〇、〇〇〇トン級船一 〇、〇〇〇トン級船二 七、〇〇〇トン級船一 五、〇〇〇トン級船一
- 六、二一——わが潜水艦カナダヴァンクーパー島米本土オレゴン州砲撃——軍事施設破壊
- 六、上旬、七、上旬——西印度洋及南阿方面潜水艦の戦果——撃沈敵船二五、約二〇萬トン

開戦より七、一〇迄——敵船舶撃沈破綜合、わが潜水艦によるもの 九九隻 計七二四、〇〇〇トン

開戦より七、一〇迄——敵潜水艦、撃沈破累計——撃沈潜水艦五五隻、撃破潜水艦三八隻 計 九七隻

- 七、一六——潜水艦ダツチハーバー方面活躍——撃沈六、〇〇〇トン級一
- 七、下旬、八、上旬——濠洲周邊海域に潜水艦活躍——撃沈敵船一〇約九萬トン
- 八、三一——アリューション列島方面艦水艦アトカ島、ナザン灣奇襲——大損害 米甲巡ノーザンブトン型一
- 九、二五發表——樞軸海軍と協同作戦に従事わが潜水艦大西洋に進出

——八月七日よりの第一次ソロモン海戦より、十一月三十日のルンガ沖夜戦に至る殆んど寧日なき海上戦闘に於て、英米潜水艦の撃沈されたもの數十隻に及び、之に對してわが潜水艦の損害は僅かに沈没一、中破一に過ぎない。

依つて開戦以來今日に至るまで、英米側は潜水艦を無慮百數十隻も喪失してゐると想定し得るのである。

第一章冒頭の——わが潜水艦作戦のところで述べたる如く、本春劈頭以來わが潜水艦の熾烈なる活躍振りは、獨伊潜艦の新攻勢と相俟つて、見るべきもの甚だ多いのである。

今次大東亞戦争を以て、その實戰参加は初めてとする、謂はゞ初陣のわが潜水艦隊が、かくも列國驚異の大戦果を挙げつゝあることは、その眞因は那邊にあるのか。

それは、諸君に對し最早論明の要はあるまいと思ふ。

決戦は續いて居る

今や大東亞戦争開戦以來、こゝに一年有餘——わが日章旗、軍艦旗は太平洋、印度洋を壓して、へんぼんと翻つてゐる。僅か一年前、世界の誰がこの現實を豫想し得たであらう。大御稜威の下、まことに日本國威の隆々たる世界的顯現と云はねばならぬ。

こゝに開戦前に於ける英米の挑戦を回顧するに、當時彼等は着々と戦備を整へ、南方要域の戦略配備を一日一日と強化し、既に昭和十六年十二月八日に先立つて、その對日作戦計畫を發動し、現に飛行機、艦艇による日本近海の強行偵察、或は敵潜水艦のパラオ偵察、更にハワイ西方海域に於けるわが潜水艦に對する攻撃など、日本の耐え得る死か生かの最後の關頭に立つに至つたの

である。

かくて——宣戦の大詔は渙發せられた。大詔を拜するや、わが皇軍將兵は猛然起ち上り、陸に空に又海に——疾風怒濤の進撃を以て——英米兵力を驅逐撃碎し、早くも今日に見るが如きわれに有利なる戰略態勢の基礎を確立するに至つたのである。

然るに今日、敵は相次ぐ敗戦にも拘らず豊富なる物資と強大なる生産力にものを云はせて、執拗なる反撃を企圖してゐる。殊に昨夏以來のソロモン方面に於ける開戦以來最も大規模なる總反攻に敗れてからは、米國の執るべき手段は、所謂ゲリラ戦の展開以外になつたものゝ如くである。即ち飛行機、潜水艦を以てするそれである。殊に主力的海上決戦は別としても、敵は今後頽勢になればなるほど、飛行機と潜水艦を以てわれに挑戦してくるであらう。

これは、生産戦妨碍と、全國民の思想戦を狙ふものであり、諸君は十分これに對する備へと心構へ、覺悟が絶對に必要なのである。

この意味に於ても——諸君は、長期戦下に於ける潜水艦の重要性を、より一層深く認識し把握せねばならない。

こゝに——潜水艦戦の將來に就て、些か私見を述べて、諸君の参考の資としたいと思ふ。既に

各所で述べたる如く——今後益々飛行機の發達することは明かなるところで、この飛行機がいかに制壓して居る所でも、縦横無盡に活躍出来るのは、要するに潜水艦である。即ち、水層といふ厚い防禦物を被つてどん／＼敵の中に突込んで行く、かくも徹底的に敵の懐に飛び込めるのは、潜水艦あるのみと斷言し得るのである。従つて今後益々潜水艦の任務は、飛行機のそれと正比例して重大化されて行くであらう。

次に又、一口に潜水艦と云つても、今後は各種の潜水艦が必要になつて來ることは、火を賭るよりも明かである。即ち、大型、中型、小型、各種の潜水艦が必要となる。そして防禦にも、又攻勢にも使用される、艦隊と協同する潜水艦、通商破壊に役立つ潜水艦、これからは各種の任務が潜水艦に課せられて來ると思ふのである。故に潜水艦の活躍の場面は非常に廣大となつて來るから、要するに、飛行機の發達と平行して、潜水艦も急速に發達せねばならぬこととなる。

何故なら、潜水艦の直接の敵は飛行機であるからである。

かく——潜水艦が更に發達の曉には、敵機に爆撃されぬよう——潜水艦で物資を運搬するといふことも實現されて來ると思ふ。又、大型潜水艦による敵前上陸も考へられぬでもない。或は又潜水航空母艦の完成も想像されるのである。

かく考へて來れば、今後潜水艦の用途は益々廣くなり、と同時に、潜水艦をどん／＼増強していかなばならぬと思ふ。

現下、日本の生産擴充が云々されてゐる時、潜水艦はいくらあつても餘るといふことはない。潜水艦が多數にあれば、自由自在に敵の背後に迫り、敵の最も弱點とする交通路を衝くことも出来る。潜水艦を澤山造ると云ふことは、現下日本の急務であると云つても決して過言ではない。潜水艦の数が足りぬと云ふことは、結局乗員を疲らせ、従つて亦その戦果も擧らぬといふことになる。かゝる見地からも——大東亞戰完遂のためには、飛行機と共に、多數の潜水艦を建造することが、大いに必要である。と同時に、これが乗組員養成も必要となつて來る。

潜水艦の重要性を認識する青年諸君は、自ら進んで海軍へ征き、未來の潜水艦長たらんことを期すべきである。

従來とかく、潜水艦に關しては、一般に花々しく宣傳されなかつたが爲に、一般の潜水艦に對する認識が甚だ稀薄であつたことは、まことに遺憾に堪へない。

しかるに、今次の戦争に於ける——潜水艦の赫々たる戦果とその重要性は、俄然一般の注意を惹き、その認識を深めたことは争へぬ事實である。由來、潜水艦なるものは、それ自身非常に機

構が複雑で、むづかしい艦である。そして今日の發達を見るまでも、幾多の高價な犠牲を拂つて來たのである。

だが、今次の戦争を機として、そこに一つの段階を劃して、今後更に一段と躍進的進歩をなすべきことに直面したのである。即ち、今次の戦争によつて得た教訓を、充分に取り入れた——新しい潜水艦の出現である。さうしたものを造らねばならぬことは、今次の大戦果に鑑み、何人と雖痛感するであらう。

この點に就て、特に私は現下青年諸君の自覺を促したいのである。

翻つて、世界の戦局をみるに、その前途はまことに多事といふべきである。英米兩國の戦争目的は、必ずしも同一とは認め難いが、日本の大東亞建設を不可能ならしめる一方、歐洲に於ける獨伊の新秩序建設を阻止せんとするのが、その共通の大目的である。しかして今や、英米共に必死の反撃を繰返しつつある。

その反撃を撃砕しつつあるものゝ一つに、日獨伊潜水艦の活動があることを吾人は一時も忘れてはならない。そして、彼等の反撃手段として、執拗なる潜水艦戦術のあることも亦、深く銘記

すべきである。

今や、前線の將兵は、眼中榮譽もなく、地位もなく、ひたすら大君の御爲め、國家のためにハワイ眞珠灣に散つた——九軍神と同じ精神をもつて、戦つてゐるのである。この赤誠、この氣魄は、日本人たる限り誰一人としてもたぬものはない筈である。

今や諸君は、單にわが潜水艦の赫々たる戦績を回顧し、それに酔ふのみであつてはならぬ。開戦第二年は、實に緒戦より本格戦への移行であり、完全に敵を撃滅する本格的戦争への發足なのである。

世界の三大洋に於て、潜水艦決戦は今戦はれて居り、尙つゞいてゐるのである。

出版會承認 い 30327



潜水艦出撃 定價一圓八十錢
 特別行爲稅相當額七錢 合計一圓八十七錢
 昭和十八年七月五日印 刷 一五
 昭和十八年七月十日發 行 五〇〇部

著 者 匠 差 胤 次
 發行者 東京市神田區神保町二ノ一九 設 樂 得 二
 印刷者 東京市神田區神保町一ノ元 東 三 七 岩 崎 印 刷 所
 發行所 東京市神田區神保町二ノ一九 東 華 書 房
 電話九段 〇五六九
 振替東京一六六六六八

配給元 東京市神田區淡路町二ノ九
 日本出版配給株式會社

出版會會員番號 120133 番



963
28



賣價(税込) ¥1.87